



# fure - fure





## 副学長 荻沼 一男



高知県立大学では副学長が学生部長として、学生さんの安全、学生生活の充実、健康管理、学業支援、就職支援、人権保護など学生生活全般を支援する体制を整えて取り組んでいます。本学は平成23年4月1日から校名を変更し、高知女子大学から現在の高知県立大学となり、その前年度から男女共学になりました。男女共学化と同時に、看護学部を含む池キャンパス3学部の入学定員数が増加され、看護学部は1学年80名となり、本年（平成25年）4月4日の入学式をもって、看護学部も定員増加の過程は終了し、320名以上の看護学部生が池キャンパスで学ぶこととなります。

これまで、就職率100%、看護師国家試験合格率100%であった看護学部は本学の誇りです。1学年80名以上の学生さんの就職・国家試験合格率の維持は大変でしょうが、教職員共々、その目的達成のため精一杯努力をする所存ですので、学生さんも勉学によりいっそう勉学に励んでください。

池キャンパス3学部の学生総数は、平成25年4月4日をもって、3学部併せて760名以上となります。それに伴う駐車場・駐輪場・食堂などの狭隘の緩和、教育設備の改善など、学長の陣頭指揮下、教職員一同は努力して行きますので、学生さんの福利厚生につきましては、オピニオンボックスなどを通してご意見を頂ければ幸いです。

## 夏GINGAの活動を支援して 学生課学生支援担当チーフ 山崎水紀夫

2012年9月、岩手県沿岸部で44名の学生が仮設住宅での支援活動に参加（看護学部23名）しました。私自身が震災1週間後に岩手県大槌町に赴き3回の支援を行ったご縁もありバスツアーを企画しました。

「被災地を目の前にした衝撃、被災者とのふれ合いで磨かれる感性、他大生との交流による刺激...」。こうした体験が個々の感性の中でどう化学反応を起こすのか。9日間の貴重な経験を一過性の感動で終わらさず、地域防災や専門性を生かした活動につなげてもらいたいと企画しましたが、その後の動きとして、防災とジェンダーへの取り組み、関西の学生を高知に招いた防災活動の企画など、着実に芽吹きつつあると感じています。

自身が内閣府防災ボランティア活動検討会委員や被災地支援スーパーバイザーをしているネットワークや経験を生かして、今後も防災をキーワードにした学生支援に積極的に取り組んでいきたいと思っています。



## 東日本大震災を感じて 2回生 芝田早紀子

平成24年9月12日～17日（第6期）、同19日～24日（第7期）の2期にわたり、岩手県沿岸部の仮設住宅での支援活動“夏GINGA”を展開し、私は第7期に参加させていただきました。



震災から約一年半が経過した被災地は、被害を受けた建物の一部がそのまま残り、草が覆い茂っているその場所に町があったということを想像することは困難でした。そんな被災地での活動を通して自然の恐ろしさ、人間の無力さ、多くの悲しみや小さな希望など多くのことを学びました。また、自分の五感で感じる大切さも改めて考えさせられました。小さな一歩からかもしれませんが、この体験を伝えていくことが自分にできることであり、これからも震災について多くの人を巻き込みながら考えていきたいと思っています。

支援活動では他大学の学生との交流もあり、人の意見や考え方を知るととてもいい機会でした。日中の活動や夜の振り返りでは真剣な雰囲気、時には意見がぶつかることもありましたが、大切な仲間と出会うことができました。





## 1 回生



恒例の学生主体による大学祭が10月27・28日に開催されました。ステージでは学部対抗のクイズ合戦やバンドの演奏など熱意あふれるスタンプが繰り広げられました。看護学部からは1回生が毎年参加し、今年は聴診器をデザインしたオレンジ色のTシャツを全員が着用して“唐揚げとフライドポテト”の模擬店を出しました。最初は準備に手惑いましたが、終わってみると唐揚げとフライドポテトは完売となっていました。この大学祭の参加を通して、仲間と一緒に一つの方向に向かうことの達成感、大学生生活の楽しさを実感していました。

学業では、薬理などの専門的な講義に加え、血圧測定、洗髪などの技術演習が増えています。12月には、初めての実習である“ふれあい看護実習”に参加し、様々な職種の方の業務を通して看護師の役割について考えることができました。また、看護師さんと共に行動をさせていただき貴重な体験を得ました。このように、看護の道へ一歩一歩着実に進んでいます。

## 2 回生



毎年12月は、2回生主催のクリスマスパーティを行っています。これは、大学生生活のなかで1回生から4回生までの学生と看護学部教員との交流を深めることができるイベントのひとつです。今年は12月15日に開催されました。

卒業された多くの先輩方から引き継がれている、伝統あるこのイベントを企画運営することの責任を感じながら、参加者全員に楽しんでもらうために、早い時期から準備に取りかかりました。他学年の委員や学年担当と話し合いの場をもち、委員が中心となって2回生全員が協力し合い、綿密に、そして着実に準備をすすめていきました。

当日は朝早くから会場設営をし、受付や司会、写真係などそれぞれの役割を果たしながら、各学年のスタンプでは2回生は手話を交えた歌を披露しました。参加者からは「卒業前のいい思い出になった」「先輩と話せてよかった」「企画が楽しくて例年より盛り上がった」など、うれしい評価をいただきました。

## 3 回生



3回生は後期から領域看護実習が始まりました。13～14名のグループで急性期看護・慢性期看護・精神看護・小児看護・母性看護・地域看護の6領域を2週間ずつローテーションし、看護実践を学んでいます。小児看護実習では実習施設で学生が企画・開催したクリスマス会の様子が高知新聞に掲載されました。実習での患者さんや看護師さん、地域で生活されている対象者とのかわりを通し、看護のおもしろさや専門職としての責任を実感するなど、それぞれが学びを深め成長しています。12月に開催された看護師国家試験オリエンテーションでは卒業した先輩や教員から具体的な試験対策が紹介されました。また1月には就職希望調査も実施されました。領域看護実習を中心としたスケジュールの中でも、看護職としての自分の将来像を現実的に描き始め、各自の課題に精一杯取り組んでいます。

## 4 回生



掲載写真は10月の成人看護実習でグループワークをしているところです。この実習は、これまでに講義や実習で習得してきた知識・技術・態度・行為を統合し、看護援助方法を考え、実施、評価するという一連の過程を学内で行います。事例として提示された患者情報を基に、患者の症状や状態が意味することや状態から予測されることを総合的に判断し、文献を調べて根拠に基づく看護援助の計画を立案して、教員を患者に見立てて看護援助をシミュレーションしました。実際の患者ではないものの、状態の急変する患者への対応など、現場さながらの状況設定で実習しました。学生は調べるものも多く大変だといいいながらも、春からの就職場所をイメージし、生き生きと実習に取り組んでいました。

12月には看護研究の論文提出、2月には国家試験、3月には看護研究発表会と卒業まで息つく間のない日々が続きますが、4回生全員で力を合わせて頑張っています。



## ■ 教育の工夫 ～ローテーション実習～

本学部では、平成24年度後期から3回生の領域看護実習が80人の新カリキュラムとなり、新たに開始されました。学生は10月から2月までの期間に急性期看護実習、慢性期看護実習、母性看護実習、小児看護実習、精神看護実習、地域看護実習をそれぞれ2週間行います。この新しい実習をより豊かで効果的で充実した内容にするために、開始の1年前からそれぞれの看護領域の実習担当教員が文部科学省から出されている卒業時の到達目標を意識して、実習目標や実習内容・方法、具体的な展開などについて検討してきました。そして、実習施設の管理者や指導者との調整を重ね、検討した内容は学部の全教員で共通認識し、実習担当教員を中心として、臨床実習委員会、教務委員会、学生委員会、学年担当教員、健康管理センターなどが連携して実習支援体制を整え、スタートすることができました。



小児看護実習は昨年まで、急性期看護実習、慢性期看護実習など、ほとんどの実習を終えてから4回生で行って行っていました。実習初日は、シミュレーション教育を取り入れました。子どもと接した経験の少ない学生が、まず、子どもとのコミュニケーションで困らないように、大学で練習をして実習に臨みました。子どもが病気になることで、身体的、精神的、社会的にどのような影響を与えているのか、学生と一緒に考えていくようにしました。疾患に関する病態生理を理解しながら、子どもの最善の権利を守るために、どのような看護実践を行ったら良いか、家族とともに考えました。子どもとの“遊び”も看護技術の一つとして捉え、入院中の子どもが、なるべく家庭に近い環境で検査、治療ができるように、ストレスが軽減できるように、成長発達に応じた看護援助が実践できたと思います。

約5か月にわたる6領域の看護実習を乗り越え目標到達した学生は、ひとまわりもふたまわりも成長して、ユニホーム姿が看護専門職者として輝いて見えます。今後も看護学部では、臨地実習において学生のもつ力を引きだし、看護実践能力を高められるように教育方法を工夫していきたいと思ひます。

## ■ 学生さんからのメッセージ

私たち三回生は10月～2月までの間、急性期・慢性期・母性・小児・精神・地域の領域に分かれ、各8日間の実習にいきました。実習ではこれまで学内で学んだ知識をもとに、対象者を身体・精神的・社会的側面から捉え、必要な看護ケアを考え展開していきました。実習先では自身の看護実践に対して看護師さんや先生方からのご指導をうけ、それぞれの領域を終えるごとに臨床ならではの学びを得て少しずつ成長してきたと思ひます。このような充実した実習をとったのは、患者さんのご協力や、実習先の看護師さんや先生方のご指導があったことだと改めて感じています。また、しんどい時や辛い時もありましたが、毎日実習に行くことが出来たのは、グループメンバーの励ましがあったからこそだと強く実感しています。多くの方々を支えられて領域実習を終えられことへの感謝の気持ちを忘れず、4回生に向けて頑張っていきたいと思ひます。



3回生 足立瑠理子



看護学部に入學して、講義や演習を通じて看護の基礎を少しずつ学びつつあります。看護学を学んで行くなかで改めて看護師として働くことの厳しさを痛感しました。また、講義や豊富な演習を多くこなすことで、看護に必要な知識や技術を身につけることができているのを痛感しています。大学生活では講義やサークルを通じて同じ志を持つ友達がたくさんできました。たくさんの看護の知識や技術を身につけることは大変で、不安や焦りも感じることがありますが、周りの友達とお互いを高めながら将来全国で活躍できる看護師になることを夢見て日々努力しています。

1回生 笹尾 誉宗

[ニュースレターの名前の意味] fure-fure 学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。 [fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp](mailto:fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp)